内外交差点

スマホが社会参加の絶対条件？ ＩＴ難民出さぬ科学の進歩に期待

岩村　龍一氏（コミタクモビリティサービス会長）　第４／12回

前回、ベトナムのＧｒａｂＢｉｋｅのことを書いたが、タクシーにしろライドシェアにしろ、海外におけるアプリの普及は凄まじいものがある。だから日本は古いのだと言うつもりはないのだが、私たちを取り巻く環境は劇的に変化をしているのだと改めて強く感じる。

昨年、博多から高速船に乗って韓国の釜山へ行った。隣国の近さを改めて感じるほど短時間で快適な船旅であったが、釜山の港に着いてから、ほとほと困ったことがあった。タクシー乗り場にタクシーがいないのである。仮にも国際フェリーターミナルである。空港ほどの規模ではないにせよ、国の玄関口、ましてや釜山と言えばソウルに次ぐ韓国第二の大都会である。乗り場にタクシーが１両もいないなどとは想像もしなかったし、できなかった。タイミングが悪いのだろう、少し待てばと思って周囲を見回すと、おかしなことに気が付いた。乗り場とは離れたところでタクシーに乗り込む人たちがいるではないか。それもあちこちでだ。ん？これは早い者勝ちで乗り場以外の場所での争奪戦になっているのかと思い、少し乗り場を離れてタクシーを探してみた。案の定、すぐに空のタクシーが１両やって来た。早い者勝ちだからと急いで乗り込もうとすると、ドライバーが何か言っている。もちろん韓国語はわからないが、どうやら予約があると言っているようだ。あら、予約車なのか、ならそう書いておけよって表示灯にはハングルで予約と表示されているらしい。仕方なくもう一度乗り場に戻ると、流暢な日本語で高齢男性に話しかけられた。「タクシーをお待ちなら、たぶん無理かと思いますよ。アプリで呼ばないと来ないでしょう」。キョトンとする私に、どこへ行くのかと尋ねるのでホテルの名前を告げると、迎えが来るのでお送りしますよ、一緒にどうぞと言ってくれた。これには本当に助かったが、事情が飲み込めない私は、この男性に車内で質問攻めをすることとなる。

韓国では、ここ数年、「カカオＴ」というタクシーアプリが爆発的に普及したらしい。かつては「ＬＩＮＥ」とトークアプリの分野で壮絶な戦いをしたそうだが、ＬＩＮＥを制した後に様々な分野でアプリ開発を繰り広げているという。韓国の都会では繁忙時間帯にはタクシーの争奪戦で、通りに立ちタクシーを止めるのにひと苦労している風景が日常的であったが、アプリの出現により「止める」必要がなくなり、「迎えに来るタクシー」へと変貌したのである。通りに立つことなくスマホで暖かい部屋に居ながらにしてタクシーが呼べるアプリは、瞬く間に普及したという。そして今や、繁忙時間帯においてはアプリで呼ばない限り、タクシーには乗れない。かくしてアプリの使えない私のような外国人旅行者は、タクシー難民となるのである。ん？ちょっと待てよ、スマホを持たないおじいちゃん、おばあちゃんはどうしているのだろうか…？。

アプリで呼ばないとタクシーが来ない。スマホが使えない人はそれ以前の話だとすると、もはやスマホの利用が社会参加の絶対条件と言わざるを得ない。タクシーも歴とした社会インフラである。国民にそんな意識はないにせよ、確かに切り捨てられた人々は存在するはずだ。そういう社会を韓国は選択したのだとも言える。果たして日本は、同様の選択をするのだろうか。山の中に住むたったひとりの為に水や電気を通し、アスファルト道路まで作っちゃう国である。逆に、落ちこぼれる者を出すのは社会悪だとする風潮があるように思う。

だからと言って、時代の変化は止まらない。ぼやぼやしていると国自体が置いて行かれるのである。そしてこの先、ますます大変革が起きるのは必然である。「強いものが生き残るのではない。変化に対応できるものが生き残るのだ」とは、かのダーウィンの有名な言葉だが、変化を拒否する者は生物学上、淘汰される。ただ、私は死ぬまでガラケーだと、アナログ派を自認する人の社会参加を拒むことが正しい社会だとは、どうしても思えない気がする。

ライドシェアの議論が続いている。時代はさらに自動運転へと向かうだろう。ＩＴ難民を生み出さないことも科学技術の進歩で補うことに期待する。「呼ばなくても来るタクシー」が現れるのは、そう遠くない未来だと思う。